
反逆の今日

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反逆の今日

【Nコード】

N0655J

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

中学二年生の隆一は、スパルタ教育の果てに家出した。まだ見ぬ社会の暗部に飛び込んだ彼は、そこで様々な事を知るようになる。だが、ある時彼は耐え難い事実に向き合う事になる……。久々の純文学作品です。

(前書き)

この物語は若干の性描写を含んでいます。不愉快に感じられる方もおられるかもしれませんが、その類の描写の苦手な方は読むのをご遠慮いただければと思います。

今夜は月はおるか星の瞬き一つない闇夜だ。山原隆一がひたすら歩く県道には途切れ途切れの街灯しか明かりがない。心細くて仕方ないが、家に帰ると言う選択肢はない。蒸し暑い夜だ。額の微かな汗をぬぐうと、隆一は喉の渴きを覚えた。だが、自動販売機もコンビニエンスストアもこの辺りには無いのは知っている。その上彼は財布も持っていなかった。ともかく、この両側の畦道と田圃の見える景色を抜け出して、街のほうへ行くんだ。彼は黙々と歩いた。数時間前の父親の亮太との大喧嘩を思い出さずにはいられない。

彼の父親は地元総合病院の外科医で、隆一にも同じように医業を継いで欲しいと願っていた。中学校に入った頃から隆一に対して言う事は、ただ勉強しろ、医大には怠けていては入れない、だけになった。隆一はしばしば反発した。医者になんか別になりたくない、とある時はつきり言った。その途端に横っ面を張り飛ばされた。それならこの家から出て行け、と命令された。隆一は屈辱に顔を歪ませ、涙ぐんで自分の部屋に逃げ戻った。そんな事が何回繰り返されたらう。今夜の事を思い出すと怒りで体が震える。亮太は、勝手に許可無く隆一の部屋に上がりこみ、Wiiを取り上げ、ソフトも含めて全部捨ててしまっていた。中学校から帰ってきた隆一は体が震え、居間にいた父親に怒鳴りつけた。

「お父さん、俺の部屋に勝手に入ったのか！」

「うるさい！ 勉強もせずにテレビゲームばかりしているからだ。お前のためを思ってる事なんだ」

この言い分がもつとも彼の癪に障った。俺の気も知らずになんだ。絶対に許さない。

「お父さんには俺の事なんか何もわかつちやいないんだ。俺はお前のロボットじゃないんだ」

初めて、父親を『お前』呼ばわりした。亮太は火がついたように怒って、隆一の頬を平手で張り倒した後、さらに襟首を掴んで引きずり、彼を床に押し付けて、俺の事をお前と呼んだ事を謝れ、と喚いた。母親の静香が真っ青になって仲裁に入ったが、亮太はそれを振りほどき、黙って紅潮して父親を睨む隆一を立ち上げらせ、玄関まで引きずって大きな扉を開けて放り出した。

「貴様のような者はうちの者じゃない！二度と敷居をまたぐな！」
そう宣言した後、隆一の靴を外に投げ、扉を閉めて鍵をかけた。
そして、おろおろする静香を押しやって自分の部屋に去って行った。

隆一は半泣きになりながら家の敷地を飛び出し、そのまま今もただ行き場も無く歩き続けているのだった。

どれぐらい歩いたのだろうか、どこまでも夜道は暗く、興奮したので疲労を感じていた。隆一の家は田舎の山あいにあるので、住宅街に出るまでかなりの道のりがある。覚束ない足取りで、知らずに道路の真ん中を歩いていたらしい。後ろからクラクションが聞こえた。だが、隆一はどうでもいいと感じ、どかずにそのまま道の中央を歩いた。県道は狭く、一車線ずつしかない程度だ。ふいに、後ろから強い力で肩を？まれた。

「ガキ、どかんかあドアホ！」

の言葉が聞こえて振りむいたと同時に顔面に凄まじい衝撃があった。隆一は体ごと吹っ飛んだ。何が起こったのかわからない。さらに、起き上がろうとすると、勢いよく鼻に硬いものが当たり、痛い、と思うまもなく今度はわき腹に重い何かかめり込んだ。彼は咄嗟の本能でそれにしがみついた。痛みに怒りを覚え、攻撃的な意志が彼を包んだ。いきなり何しやがるんだ！

「離さんか、ボ、ボケエ」

車から降りてきた二人のうち一人が、右足に隆一にへばりつかれ戸惑った。

「何しやがるんだオラア、クソオ！」

と大声で叫びながら、隆一は体勢を立て直し、つかまっている一人の腹に思い切り拳を入れた。その時、初めて相手の風貌がおぼろな車のライトの光で見えた。ダーク系のスーツに短く刈り上げた髪。まともな奴らじゃないな、と感じた途端、その男に激しい頭突きを食らった。後ろによるめくが、倒れない。凄まじい形相で二人の男を睨みつけた。殺してやる。本気でそう思った。その時、後ろの黒いセダン車から、もう一人男が降りてきた。ヘッドライトの逆光で隆一からは顔は全く見えない。

「待て待て、お前ら。このガキ、凄い顔してるな」

太った体躯、鷹揚な話し方、こいつは何だ、と隆一は肩で息をしながら思った。

「お前、こんな時間に歩いてどこ行くんだ」

隆一は答えない。ただ、どうやってこの場から逃げようか、と溢れる鼻血をこすりながら考え出していた。

「さしずめ、家出でもしたんだろう。殺気がただ事じゃあない。よほど酷くケンカしたんだろう」

そう言った時のその男の声はとても優しく隆一に響いた。目つきが柔らかかった。彼は、発していた怒りが冷えていくのを感じた。

「どうだ、家出少年。どうせ行くあてもないんだろ。今日はワシらのとこに来いよ。何、とって食いやせんから、な」

そう言って太った男は体を揺すらせて笑った。二人の男も剣呑な態度を止め、隆一に手招きした。隆一は、その丸々とした男の先ほどの言葉と雰囲気引かれ、なんとなくそのセダン車に乗り込んでしまった。

車の中は涼しかった。興奮して蒸気した体に心地よい。二人の男が前に、太った男と隆一が後部座席に座った。

「お前、名前は何ていうんだ。俺は片山慎一だ」

「……山原隆一」渡されたティッシュで鼻血を止めながら答えた。

「親とケンカしたのか」

「そう」

「ま、深い訳は聞かない。お前の様子が尋常じゃなかったからよ。俺はお前が気に入ったって訳だ、気合が入ってるからな。とりあえず、今日はウチの事務所に泊まれよ。ベッドも風呂もついてるから」

「じゃあオヤジ、事務所に寄りますね」

「おお、頼むわ」

それだけ言うと片山は窓を開けて煙草を吸いはじめた。隆一の前には誰も煙草を吸う人間がいなかったたので、酷く煙たく感じた。

「そうだ、お前何歳なのかな？」

「14歳」

「若いな。若いどころじゃねえな、大太よりも若いじゃねえか」

大太と呼ばれた運転手はそうですね、参りましたと頭をかいた。横の角刈りのもう少し年上の男がこう言った。

「コイツ、いい拳持ってましたよ。まだ腹筋が痛いです」

「そうかそうか」片山は微笑み、煙草を灰皿に押し付けた。

車は繁華街の中の雑居ビルの前で泊まった。片山が、降りろ、と声をかけ、隆一と二人だけビルのエレベーターに乗った。

「一人ぼっちになるけど、大丈夫だよな？一人じゃ寝れない、ってんなら添い寝してやってもいいが」

隆一は慌てて首を振った。片山は笑いながら「片山総合商事」と表札の出ている部屋の扉を開けた。

「冷蔵庫になんかあったかな」

電灯をつけながら片山は独り言をつぶやいている。隆一は案外広い事に感心していた。途端、玄関に置いてある虎の剥製に度肝を抜かれた。よく見れば、壁にはいかめしい文字で書かれた評語や模造刀のようなものが飾ってあるし、棚の上には不気味な彫像がひしめいている。一言で言えば下品な装飾だ、と隆一は思った。一応中央には申し訳程度にデスクやファックス機が置いてある。その奥に応接用らしきソファなどがある。

「物珍しいだろう。こんな部屋入った事ないよな。で、お前の寝るのはここだ」

奥の扉を開くと、そこは簡易用の寝室だった。ベッドとタンスと小さなデスクがある。ドラマで見た事のあるビジネスホテルがこんな感じだったな、と隆一は思った。そんなじゃあ今日はここで休め、とだけ片山は言って去って行った。この数時間の怒涛を思い出して、隆一は何も考えられなくなった。ベッドに入って痛む鼻を押さええているうちにすぐに眠りについてしまった。

翌朝、喉が渴いたので目が覚めた。部屋を出ると、そこに一人の若い女性がいて、パソコンの画面に見入っていた。驚いた隆一が何も言えずに立ち尽くしていると、向こうが気づいた。やや濃い顔だが、魅力的な愛らしい顔立ちをしている。

「おはよう。あー、鼻まだ腫れてるね、確かに」

そう言いながら歩み寄ってきて顔を近づけてきた。甘い香水のような香りがした。恥ずかしくて目を合わせられない。

「昨日の夜タオルで冷やしといたらだいぶ違っただろうけどな」

指先で鼻筋をなで、折れてないね、それじゃ行こうか、と言いなからパソコンの電源を切り、黒の革カバンを肩にかけた。ピンク生地の手帳をTシャツにシヨートのジーンズを履いている。

「ど、どこに？」と隆一がようやく聞くと、

「あたしんち。片山社長に面倒見てくれて頼まれたのよ。真夜中に電話してくるから何かと思っただわ」

隆一は突如としてこれまで全く接した事もないような種類の女性の家に住むことになったらしい。鼻だけが痛む気がした。なるようになれ、と自棄になってついて行った。どうせ行く場所はもうない。彼女は赤い小型車に乗っていた。軽快にビルの前を出発した。

「君名前なんだったっけ？山本隆一くんだっけ」

「山原、です」

「そっかそっか。私は大庭有紀。本名よ。お店では愛華だけど。君、

家出したんだって？良かったら事情話してくれる？嫌ならいいけど」

隆一は少し考えた後、オヤジとケンカしたんす、とだけ説明し、後は言わなかった。ふと、あの親父は警察に捜索願いを出したりするのだから、などと自問した。

「君ね、犬大丈夫？ウチ二匹ほどチワワとダックスフンドがいるんだけど」

「全然。犬は好き」

「そう、良かったわ。なんなら散歩に行ったり缶詰開けて餌あげたりしてくれるかな？」

「別にいいよ」

やったね、と有紀は指を鳴らした。隆一はひたすら意味なく前方を凝視していた。横の有紀の太股が眩しかったからだ。

有紀の家は入り口で暗証番号を入力して入るような最新のマンションだった。入ると隆一はその香りに戸惑った。女の人の家はこんなにいい匂いがするのか、と。室内は白とピンクが基調で清潔で温かみがあった。有紀は携帯を鳴らし、誰かに連絡していた。ふと足元を見ると二匹の小型犬が愛想よく尻尾を振っている。これがさっき言っていた犬か、と隆一は納得した。有紀が電話を切った。

「取り合えず、しばらく置いてくれだつてさ。近々また事務所に呼ぶから、だそうな」

と言うと彼女はソファアにござりと横になって、今日は久々に早起きしたから眠い、隆一くん、こいつら散歩に連れて行ってきて、と壁にかけてある首輪を指さす。暗証番号は、0825ね。覚えて？と言われたので、0825、と復唱した。じゃあよろしく、最悪はインターホン押して、3階の307号室だから、と言うと目を閉じた。隆一は足元でせがむチワワとダックスフンドに首輪をつけ、エレベーターで降りて本当に散歩に行った。まったく土地勘がないので、見知らぬ街並みを恐る恐る歩き、すぐにマンションへ戻った。戻ると有紀の姿はなく、居間のテーブルの上に、昼から仕事だから

もう少し寝る、机の上のペットフードを二匹にあげてね、後、朝ごはんは冷蔵庫の中のを適当に食べて、と書いてあった。そこで缶切を使って必死に開け、床にあった皿らしきものに入れてやった。二匹は満腹になってその辺に寝そべった。その姿を見た隆一は、突如訪れた癒しのなひとときに心が安らぐのを覚えた。人の家なので、手持ち無沙汰ながら、テレビなど見て過ごした。

昼ごろから、確かに有紀は起きてきて、シャワーを浴びて入念に化粧をはじめた。見るでもなく見ていると、興味あるの？と微笑んでくる。ない、と答えると、そりゃそうだ、男の子だもんね、そう言えば散歩と餌やりありがと、と思い出したように付け足した。隆一は、何の仕事に行くか興味を感じたが、馴れ馴れしいかも思っただけで聞かずにいた。そして彼女は出かけ、夜10時ごろ帰ってくるのだった。

そんな日が二日続いた。隆一は居間の端に布団を引いてもらって寝た。すると、近くに例の二匹が寄り添ってきた。元来犬好きの隆一は嬉しかった。ここは居心地がいい、と感じていた。有紀は気さくだし、多少おしゃべりだが、一人じゃべって一人で納得するので苦にならなかった。三日目、隆一は片山に例の事務所に呼び出され、有紀に片道は送ってもらい、帰りは電車でと言う事で地図を書いてもらい、小銭をもらった。事務所には片山の他に例の二人を含む何人かが働いていた。奥のソファアに二人は座った。

「どうだ、気持ちは落ち着いたか？」

「はい」

「家に帰りたくなかったか？」

隆一は首を振った。そんな気持ちはまったく沸かない、と正直に答えた。

「そうか、なら帰らなくていい。ただな、学校も行かず家にいても暇だろ」

「はい、暇です」

「よしよし、そんじゃ仕事しろ、仕事。何、ちつとも難しくも危なくもない仕事だ。中学生のお前でも出来るよ」

「僕、まだアルバイトもしたことないんです」

「大丈夫、日本語さえ使えれば小学生でも出来るから」

と、立ち上がって肩を叩いてくる。若干好奇心が沸いてきたし、隆一はじゃあやります、と言った。

「おうし、大太、隆一を名並の受付所に連れて行って、仕事教えてやってくれ」

はい、と返事したのはあの日隆一を蹴って殴ってくれた若い男だ。思わず怒りが甦った。その表情を見た大太は

「怒ってるのか、あの時は悪かった。お前道の真ん中で堂々と突っ立ってたんだからさあ」

言いながら両手をおどけて合わせて謝ってきた。謝ったなら、と隆一はまだ納得はいかないものの、許す事にした。

大太に連れられて着いたのは小さなマンションだった。その一室に案内される。中には、4人ほどの派手な化粧と露出の多い薄着の女性と、2人の中年の男性がいた。

「やあ、隆一くん、ここに配置になったのね」と、有紀が声をかけた。隆一はここで会うと思わず、驚いた。

「あ、この子なんだ、今あんたが家で預かってるのは、結構精悍な顔の男前じゃない」

「ホントだ、織田雄二系だし」

一気に室内が賑やかになった。大太はうざそうにしながら、隆一を側に座らせ、仕事の説明を始めた。

「いいか、ここは出張ヘルスの受付と待機場所なんだ。電話がかかってきたら、相手の住所を書きとめて、復唱、言い直せ。そして、丁寧にメモにとって、運転手の梶田さんと遠山さん、あともう一人、今はいないけど時任さんと言う三人の誰かに渡せ。そしたら、ここ

のお姉ちゃんを積んで車で送っていくから。お前の仕事は確実に相手の住所を聞き取る事。あと、これが料金表。聞かれるから、手元に持っとけ」

そこには40分14000円などと数字が並んでいた。隆一は、内容はわかったが、出張ヘルスの意味が分からなかった。

「あの、出張ヘルスってなんなんですか？」

大太は怪訝な顔をしたが、すぐに大笑いした。

「そっか、知らないんだな……論より証拠で行くか。おい、美鳩。ここでしてくれよ」

「はー？お金払ってくれるの？」

「いいじゃねえか。社員教育なんだから、これは」

しょうがないな、と言つて美鳩はみんなの前で大太のズボンを下ろし、陰茎を口にくわえてしゃぶりだした。隆一は突如始まったその行為に卒倒しそうになった。何をやってるんだ！？ まだ童貞の彼にはそれは衝撃の光景だった。もちろん、これまでにその手の卑猥な本やインターネットの画像を読んだことがなかったとは言わない。だが、生で見たのは初めてだった。

「隆一、わかるか。要は女の子がオツサンのところに行つてこうやってオツサンをイかせてくれるのが出張ヘルスだ」

「確かにお客はクソ親父ばかりよねえ」と普通に有紀が相槌を打った。隆一は激しく頭を殴られたような気がした。有紀も見知らぬ男の人の性器をこんな風にくわえてるのか。隆一は目を背けた。経験に裏打ちされていないので、見ても興奮はしなかった。うっ、と声を出して大太は発射した。

「飲めよ」

「はいはい」と言いながら美鳩は彼の出したものを全て飲み込んだ。大太は満足してそれをしまいながら、付け足した。

「そうそう、隆一、お前は今日からここに住むことになるから。鍵とかスペア作つてもらおうから」

「ああ。そうなんだ。ちよっと残念」と有紀は隆一にウインクした。

隆一は犬二匹に会えなくなるのを若干悲しく思った。

「んじゃ俺帰るから、みんなよろしくな。チェリーボーイを可愛がってやってくれ」

女達が嬌声を上げた。男二人も豪快に笑った。隆一は、意味が分かったので真つ赤になつてしまった。

その日から、隆一はそこに寝泊りするようになった。2DKあるので彼一人には十分だった。ややかび臭いマットとタオルケットに包まり、何をと言う事もなく考え事をしていた。俺は、これからどうなるんだろ。全くわからなかった。ただ言える事は、あの家には死んでも帰らない、と言う事だけだった。夜は深く静かだった。寝返りを何度も打つて、そして眠りについた。

出張ヘルスの仕事は楽で暇だった。せいぜい丸一日で10件程度の客しか電話してこなかった。後はリフォームの営業の電話などしかかかって来なかった。やがて隆一は運転手のうちの一人、梶田と打ち解けるようになった。何でも、会社の経営に失敗し、多額の借金を作ってしまったらしい。

「それで債権者の一人の片山社長に使ってもらつてるのさ。捕まつてる、とも言つ」

と、黄ばんだ歯で自嘲気味に笑った。隆一も自分の事を話した。彼は大きく頷いて、中学は義務教育だしどうでもいい、でもいつかは帰れよ、と言った。そんな気はない、と言うと梶田は柔和に微笑んで、今はそれでいいさ、と答えた。

ある晩、いきなり片山が電話してきて、悪いけど今から行くぞ、とだけ言つて切った。有無を言わせぬ強い口調だった。しばらくして、扉が開いた。片山以下、三人の若い衆が一緒だった。あともう一人いたが、その姿を見て隆一は怯えた。それは顔が見るも無残に膨れ上がった女性だった。しかも口に猿ぐつわをかまされ、後ろ手

に手錠をかけられていた。

「隆一、しばらく賑やかにするぞ」

片山の声がいつもと全く違う。初めて隆一は彼から恐怖を感じた。奥の部屋に入り、乱暴に女を床に転がした。一人がカバンから注射器を取り出し、台所へ行って何か準備している。男2人が乱暴に服を脱がしている。そして、注射器で何かを女性に打った後、交代で上に跨った。その間、片山は何も言わずひたすら見ていた。悲鳴のような喘ぎが室内に響き渡った。片山はテレビをつけて音量を相当上げた。二時間もそれは続いたろうか。片山は隆一に言った。

「この女はしばらくここに置いとくが、お前は一切関わるな。世話は別のモンがする。わかったな。約束違えたら承知しねえぞ」

と、三白眼ですごんだ。隆一はその圧力に逆らえず、はい、とだけ返事した。片山と三人は帰っていった。

隆一は、はつきりわかった。やはり、あいつらは只者じゃない、生粋のヤクザなんだ、と。体の震えが止まらず、何も出来なかった。耐え難い人間の邪悪を見せ付けられた。彼はそれまで知らなかった人間の真つ黒な側面を見せられたのだった。

翌朝になった。意識したくなくとも、一人一人が隣の部屋に転がっていては気になって仕方ない。傷の手当てぐらいするべきか。そうだ、水を飲ませよう。それぐらいはれまい。そう思った隆一はコップに水を汲んで持って言った。彼女は眠っているのか、目を閉じていた。隆一は腫れあがった顔に同情しながら、口にかまされた猿ぐつわを苦労して外した。彼女は目を開けたが、何も言わなかった。顔を起こし、水を口に当てると全て飲んだ。隆一は、曖昧に微笑んでまた猿ぐつわをもどした。逃がしてやりたいが、そうなる俺の身も危なくなる。だからと言って……と思悩んだ。少し経つと、一人の女性が訪問してきた。だいぶ年配で、水商売の匂いもしない人だった。大きなカバンを持っていて、少しお邪魔しますよ、などと言って上がってきて、あの女性の身の回りの世話をし始めた。慣

れた様子から、こつという事があつた時の世話係なんだろうな、と思つた。

「あのうう……質問してもいい？」と隆一は女性に尋ねてみた。

「なんだい」と彼女は素っ気無く返した。

「この人、何をしたの？」

「ああ、逃げようとしたんだよ、お店から」

「お店つて？うちの出張ヘルスのこと？」

「いんや、谷町にあるソープランドさ」

「ふーん……ありがとう」

女性は作業に戻り、彼はトースターで食パンを焼いて食べた。あ
あいう場所からは逃げられないのか、とパンをかみ締めながら思っ
た。

その日の営業が始まり、暗い気持ちで隆一は電話の前に座つてい
た。隣の部屋は締め切りにして、女性が持ってきた錠前で鍵をかけ
てしまつていた。その代わり、一日三度来て食事を食べさせトイレ
にも行かせるらしい。事情をなんとなく把握した有紀らはこわごわ
扉を見ているのだつた。

電話が鳴つた。隆一が「はい、棟川出張ヘルスサービスです」と
出た。

「一時間コースで頼む。場所は ×市 区にあるホテルラブゲート
の305号室だ。時間は……」

隆一は聞きながら、違和感を覚えた。どつかで聞いたことあるぞ。
次の瞬間、顔から火が出るほどの羞恥と怒りに襲われた。

こいつは、親父だ。亮太だ。隆一は意識が揺らぐのを必死に抑え、
声をくぐもらせて生返事をした。電話は終わった。運転手の一人、
仲良くなつた梶田が怪訝そうに、どうした隆一、と聞いてきた。隆
一は何でもないです、と答えながら、メモ用紙を渡した。有紀が私
が行くわ、と言ひ、二人は出発する準備をはじめた。隆一は、トイ
レに行きます、と周りに告げ、即座にマンションを出た。吉田の使

う車は知っている。ブルーのマーク？だ。開いてくれ、と願って後部のトランクを開けたら開いたので、そこに潜り込んだ。後はただひたすら待った。やがて、エンジン音が聞こえ、車は出発した。隆一は悪夢のような時間を過ごした。行つて何をする気なのか、何を言う気なのかはわからない。ただ、どちらにしる昨晚の顛末を知つて、あそこに残る気は既に全く失せていた。

エンジン音が止まった。目的地に着いたに違いない。そつと半締めにしていたトランクを開けた。幸い梶田には気づかれなかった。そつと見渡すと、有紀がラブホテルに入つていく。気づかれないように後をつけた。幸い、尾行者がいるなどとは有紀は想像もしていないので、後ろを振り向きもしなかった。有紀はエレベーターに乗り込む。隆一は大急ぎで階段を走つた。たぶんこつちのほうが早いだろう。階段の陰でエレベーターを見張る。有紀が降りてきた。彼は有紀が扉を開けると同時に大声を上げて走つた。驚いた有紀は扉を開けたままこちらを振り向いた。

「隆一くん！ あなた何故ここに？何かあつたの？」

隆一はいぶかる有紀を無視し、ドアを大きく開けて部屋の中に入り込んだ。そこには、ちょうど有紀を出迎えようとするガウン姿の亮太がいた。

「りゅ、隆一……？お前が何故ここに……」

亮太は顔面蒼白になった。行方不明になつた息子が、今ここに、勤務を抜け出してヘルス嬢を呼んだラブホテルの部屋に来た、だと？亮太は思考停止に陥つた。

「最低だな、親父よ」

おやじつて、まさか、と有紀が目を見開いた。その刹那、隆一は亮太に殴りかかった。全ての理性は消えていた。何発もの握り締めた拳が亮太の顔を殴りつけた。隆一に覆いかぶさられた亮太はただ腕で防いで、止めてくれ、止める、と言う事しかできなかった。有紀が、もう止めて！ と叫んで隆一に抱きついた。激しく息を乱し

た隆一に見えたのは、血を流し倒れている父親の姿だった。我に返った隆一は、息をついて出て行った。有紀が何か言ったが聞こえなかった。隆一は、怒りと悲しみで一杯だった。ぽと、ぽと、と涙が雫になってラブホテルの廊下の絨毯に染みだした。

ラブホテルを出ても、どこへも行く場所はない。隆一は、太陽の熱く照らす午後の中を、背中を丸めて歩き出した。彼の影が、長く長くアスファルトの道に伸びていた。(終わり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0655j/>

反逆の今日

2010年11月12日16時25分発行